

国際極年をめぐるデータマネジメント Data management for the International Polar Year 2007-2008

金尾 政紀^{1*}
KANAOKI, Masaki^{1*}

¹ 国立極地研究所

¹ National Institute of Polar Research

日本の南極観測開始の契機となった「国際地球観測年 (IGY)」から半世紀を経て、国際科学会議 (ICSU) と世界気象機関 (WMO) が中心となり「国際極年 (IPY 2007 - 2008)」が実施された。両極における様々な研究活動が、国際的連携により組織的・集約的に展開され、生物圏を含めた地球規模の変動現象が顕著に捉えられた。とりわけ、地球システムにおける極域の重要性はかつてないほど高まり、我が国も国際極年に主導的立場で多数の観測計画に参画した。

しかし国際極年への取り組みは極域研究の通過点に過ぎず、ポスト国際極年における地球環境変動のモニタリング、さらなる基礎科学的発見や研究観測手法の開発、国際極年の遺産 (IPY Legacy) としての観測プラットフォームの保守継続、両極で取得されたデータの包括的なマネジメント等、様々なカテゴリーで持続的に国際協力を推進することが、ポスト国際極年でも引き続き重要である。

本発表では、過去数年の国際極年をめぐるデータマネジメントの経過、並びに現況を報告する。南極科学委員会 (SCAR) や国際北極科学委員会 (IASC) の動向を踏まえた、学術会議や極地研を含む我が国の対応、また、ワールドデータセンター (WDC) をはじめ、国際科学会議 (ICSU) 下のデータ関連の学術団体における組織改変など、国際極年に関連した動向について紹介する。

キーワード: International Polar Year, National Antarctic Data Center, Data Management, Metadata Portals, Polar Information Commons, World Data System

Keywords: International Polar Year, National Antarctic Data Center, Data Management, Metadata Portals, Polar Information Commons, World Data System